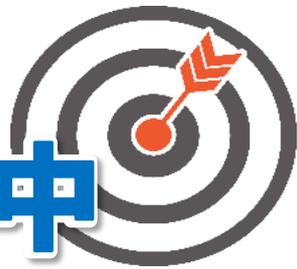


# 2023 ズバリ! 的中



# 古文

## 関西学院大学

入試問題本文が一致、かつ問内容が的中

### 入試問題

2月3日実施 学部個別日程  
二問十

### 河合塾

大学受験科 基礎シリーズ  
古文テスト  
第十一講 A [20]

[20] A 次の文章は「源氏物語」「真木柱」の巻の一部で、離婚を決めた「母君」が、夫である「般」の留守中に、娘の「姫君」を連れて邸を出ようとする場面である。これを読んで、後の問に答えよ。

姫君は、殿いとかなしうし奉り給ふ習ひに、見奉らではいかでかあらむ、今なむとも、聞こえて、また会ひ見ぬやうもこそあれと思ほすに、うつぶ伏して、え渡るまじと思はしたるを、「かく思したるなむ、いと心憂き」など、こしらへ聞こえ給ふ。ただ今も渡り給はなむと、梅も聞こえ給へど、かく暮れなむに、まさに動き給ひなむや。常に寄り居給ふ東一面の柱を、人に譲る心地し給ふもあはれにて、姫君、繪皮色の袴の重ね、たたいささかに書き、柱の乾割れたる狭間に、笄の先して押し入れ給ふ。

今はとて宿かれぬとも慣れ来つる真木の柱は我を忘るな  
えも書きやらで泣き給ふ。母君「いでや」とて、

慣れきたと思ひ出つとも何により立ち止まるべき真木の柱ぞ  
御前なる人々も、様々に悲しく、さしも思はぬ木草のもとさへ恋しからむことと、目とどめて、鼻すすり合へり。

- 【出典】  
「源氏物語」「真木柱」  
【重要語句】  
○いとかなしうす  
○習ひ  
○いかで  
○えい打滑  
○渡る  
○かく  
○心憂し  
○こしらふ  
○あはれなり  
○いささかなり  
○今は  
○かかる  
○いやらす  
○いでや  
○さしも  
○給ふ  
○奉る

二 次の文章は、「源氏物語」「真木柱」巻の一部である。大將は式部卿百の娘を北の方としていたが、時の有力者源氏の養女玉葉と新次に結ばれ、自邸に寄りつかなる。それを聞き知った式部卿官(父舎)は激怒する。これを読んで、後の問に答えよ。

父官聞きたまひて、「今は、しかかけ離れても出でたまらむに、さて心強くもしたまふ、いと面々人笑へなるとなり。おのがあらむ世の限りは、ひたぶるにしも、なごか従ひくつはたまはじ」と聞こえたまひて、にはかに御迎へあり。

北の方、御心地すし例になりて、世の中をあまきしう思ひ嘆きたまふに、かくと聞こえたまれば、「強ひて立ちまわりて、人の絶えはてんさまを見はてて思ひとちめむも、今すこし人笑へじそあらぬ」など思し立つ。

御兄弟のまたち、兵衛督は上達部におはすれはことごとしとて、中將、侍從、民部大輔など、御車三ばかりしておはした。さこそはあへかめれとかたて思ひつることなれど、さし当たりて日を限りと思へば、さからふ人々もほろほろと泣きあへり。「生ごろならひたまはぬ旅住みに、狭くはしたなきては、いかでかあまはさおらはん。かたへはおの世にまでて、静ませたまひなむ

に」などためて、人々のがし、はかまき物どもと世に振りやりつつ、乱れ散るべし。

御側近どもは、さるべきはみなしたためかきかするまに、上下泣き騒ぎたるは、いとゆゆしく見ゆ。君たちは、何心もなく歩きたまふを、母君みな呼びすたまひて、「みづからは、かく心憂き宿世、今は見はつれば、この世に勝もへきにもあらず、ともかくもさらへなむ。生ひ先運つて、さすがに、散りほたまはんありさむもの、悲しうもあべいかな。姫君とは、となるとかうなるも、おのれに添ひたまへ。なかなか、男君たちは、え離らず参りしたなうこそ降め。宮のおはんは、世のやうにまらひをすとも、かの大臣たちの御心にかかれ、現のやうにまらひをたりせとて手が知られて、人にもなり立たむこと難し。さりとして、山林にひきこつておはらむて、後の世までいかにして泣きたまふに、皆、深き心は思ひわかたむ、うひそめて泣きおはさうす。「昔物語などを見るに、世の者の心さし深き難た、時に移るひ人に従へば、おほかの心こはなりけれ。まして、現のやうにて、見る前にだにこりなき心は、懸かり所ありてもてないたまはじ」と、御乳母どもさし集りてたまひ嘆く。

(注) 1 まさに動き粘りなむや——他の女性のもとに滞在している「麗」が、そこを離れるはずがない、と叫び出した。

2 簀——手元は平たく先は細い棒状で、髪を乱れを整える用具

問一 二重傍線部a・cの「なむ」の文法的説明として最も適当なものを、次のア～エの中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えよ。

- ア 動詞の活用語尾+推量の助動詞
- イ 完了の助動詞+推量の助動詞
- ウ 強意の係助詞
- エ 願望の終助詞

a
b
c

A
B
C

問二 波線部A「聞こえて」・B「こしらへ聞こえ給へ」・C「待ち聞こえ給へ」の主語として最も適当なものを、次のア～エの中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えよ。

- ア 姫君
- イ 殿
- ウ 母君
- エ 女房たち

- 聞こゆ
- 更はず
- 更す
- 殿
- 東前
- 西前

日も暮れ、雷降りぬべき空のけしきも心細う見ゆるがべなり。「いたく荒れはべりなり。早」と御次への君達そのかしきええて、御目おし扱ひつなごめおはす。姫君は「殿いとかなしうしたてまつりたまふならひに、「見なてまつらではいかであらむ、いまたなも聞こえて、また遠か見ぬやうもこそあれ」と思はずに、うつらうつら臥して、え寝るまじし思はしたるを、金の目「かく思はしたるを、いと心憂」となご、こしへきえたまふ。たが今も寝りたまはなん、侍らきこしたまへど、かく暮れなむに、まさに離きたまひなんや。常々寄りたまふ世間の柱を人に離る心地したまふもあはれにて、姫君、袖籠の紙の重ね、ただしさをかき書き、柱の彫られたるはさまに、かすがいの先して押入れたたまふ。今はとて宿かめとも馴れきつる奥水の柱はわれを忘るなえも書きあらで泣きたまふ。

問 傍線部①「おの、③人、④みづから」は誰を指すか。最も適当なものを次のイ～ホから一つ選び、その符号をマークしなさい。

- イ 北の方
- ロ 式部卿官
- ハ 大將
- ホ 男君たち

問 傍線部②「かく」は何を指すか。その説明として最も適当なものを次のイ～ホから一つ選び、その符号をマークしなさい。

- イ 大將が北の方から離れて、いったこと
- ロ 大將が世間の物事の権となること
- ハ 式部卿官が北の方を迎えに来たこと
- ニ 北の方の気が平常に戻ったこと
- ホ 北の方がかがの侍を喚んでいること

問七 傍線部①「乳母」の読みをひらがな三字で記しなさい。

問八 傍線部②「早」は何を急かす言葉か。最も適当なものを次のイ～ホから一つ選び、その符号をマークしなさい。

- イ 天気を定めること
- ロ 乳母と別れること
- ハ 和歌を書き置くこと
- ニ 邸を出立すること
- ホ 涙を拭くこと

問九 傍線部③「かゝ思はしたる」とは姫君が、誰をどのよに思うことか。記しなさい。

問十 傍線部④「かうがい」とはどのようなものか。最も適当なものを次のイ～ホから一つ選び、その符号をマークしなさい。

- イ 整髪用具
- ロ 筆記用具
- ハ 調理用具
- ニ 運搬用具
- ホ 医療用具

問三 問題文の内容と合致するものを次のイ～ホから二つ選び、その符号をマークしなさい。

- イ 兵衛管は身分が高いため、仰々しいことになるとして、姉妹である北の方を連立には行かなかつた。
- ロ 大將邸をあとにするに際し、北の方に仕える女房たちはさほど悲しみを感ぜなかつた。
- ハ 北の方は大將邸を去る際、姫君についてはひとまずここに残しようと考えた。
- ニ 北の方は男君たちについて、式部卿官が亡くなったら出家させるしかないと考えた。
- ホ 姫君は、今は挨拶もせずにと別れても、近い将来必ず再会できると信じていた。

問四 「源氏物語」と同じく平安時代に成立した物語を次のイ～ホから一つ選び、その符号をマークしなさい。

- イ 遠野物語
- ロ 狭衣物語
- ハ 伊弉保物語
- ニ 曾我物語
- ホ 春南物語